

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：34312

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25380900

研究課題名(和文) 自叙写真法による女性の自己関連世界の研究：青年期・中年期・高齢期を対象として

研究課題名(英文) Study of the interplay between self and environment through auto-photography: In young, middle-aged, and aged women

研究代表者

向山 泰代 (MUKOYAMA, Yasuyo)

京都ノートルダム女子大学・心理学部・教授

研究者番号：80319475

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：自叙写真(auto-photography)とは、“あなたは誰ですか？”という問いに写真で答えるよう求め、撮影された写真を通して撮影者の自己を把握する手法である。本研究では、自叙写真を素材とし、青年期から高齢期の女性の自己と環境世界との関わり方の特徴を考察した。青年期女性の自叙写真の分類カテゴリーを再検討し、中年期・高齢期の女性に適合する試行版コーディングシステムや自叙写真データベースを作成し、自叙写真と性格との関連を検討するために性格尺度を整備した。結果、年齢を問わず「物」による自己定義が多く、青年期に比べ中・高齢期では時間連続性や経験の記録として「物」を意味つける傾向等が見出された。

研究成果の概要(英文)：Auto-photography is a method of finding the self by asking participants to express “who am I?” using photographs. In this study, we examined the interplay between self and environment through characteristics of photographic expression of the self of Japanese young, middle-aged, and aged women. We reexamined the classification categories of auto-photographs for young women, renewed the coding system on the trial basis, and made the auto-photographs database. We also developed a personality scale in order to examine relation between auto-photographs and personality. In this study, we found that a large number of participants defined themselves as the category of “things”. We also found that middle-aged and aged women tend to define themselves by selecting the sub-categories of “things”, “time continuity” and “past experiences”.

研究分野：社会科学、心理学、パーソナリティ、対人認知

キーワード：自叙写真 自己認知 auto-photography アイデンティティ

## 1. 研究開始当初の背景

## (1) 全体構想

操作が簡便で安価な機器の普及や通信機器等への搭載によって、近年、カメラは我々にとってより身近な道具となり、写真はコミュニケーションや自己表現の手段としての役割を増している。その一方で、個人が撮影した写真の資料としての価値は、医学・福祉・心理臨床等の現場では経験的には認められてはいるものの、写真についての心理学的な研究は少ない。本研究では、個人的資料としての写真の特長に着目する。個人が撮影した写真のうち、特に“自分を写真で表現する”目的で撮影されたアウト・フォトグラフィー (auto-photography: 以下、自叙写真とする) を研究の素材とし、これらを分類・整理することを通じて、女性の自己と環境世界との関わり方について検討することを目的とした。

## (2) 先行研究の状況

自叙写真法は、“あなたは誰ですか？”という問いかけに写真で回答するよう求め、撮影された写真を通して撮影者の自己に関連する世界を把握しようとする手法である。自叙写真法は1977年に Combs & Ziller により創案され、これまで米国を中心に研究が行われてきた。自己概念や自己に関連する事柄は質問紙を用いて測定されることが多いが、中でも“あなたは誰ですかテスト (Who are you? Technique: 以下 WAY とする)”や20答法 (Twenty statements test: 以下、TST とする) は、回答者が自由に記述できることから、予め設定された項目に回答する評定法の質問紙に比べ、回答者の個別性や独自性を重視した方法と言われている。自叙写真法での“あなたは誰ですか”という問いは、WAYと同様ながら、回答者はこの問いに言語ではなく写真という視覚的素材で答える。このことから、自叙写真法は WAY や TST の持つ回答の自由度の高さと、イメージの可視化や現実を具体的に記録するという写真の特徴を兼ね備えた方法と考えられている。

自叙写真は、撮影者自らが被写体を選択するため、撮影者の指向を当事者の視点から捉え、撮影者の生活環境や行動様式等の情報を含み、豊かな読解と語りを引き出す素材となる。また、写真による表現は言語による表現よりも年齢・文化・能力による制約を受けにくいと言われている。さらに、写真の撮影そのものが撮影者の興味を喚起し、自己客体視を促す等、撮影を通じて自身や環境への気づき・関心を促す効果も期待できる。

米国における先行研究では、被写体や表現内容の分類、写真冊子の印象評定と撮影者の性格等の個人特性との関係についての報告がある (e.g. Ziller, 1990)。日本では自叙写真法あるいは類似の手続きによって収集された写真を扱った研究として、安川 (2005,

2008) による大学生を対象とした視覚社会学研究と、日米の大学生を対象に自己呈示の文化差を検討した園田らの研究がある (e.g. Leuers・園田, 1998)。この他、“一日の生活と好きなモノ”を撮影した写真を撮影者の心的世界の表現とみなし、これを文化精神医学の立場から解釈を加えた写真投影法という方法も、野田 (1988) によって公表されている。しかし、米国での研究結果をそのまま日本に適用できるわけではないし、日本での研究は僅かである。加えて、日本での先行研究は、撮影者の視覚イメージの解析に目的であったり、日米の自己呈示の文化差に焦点があったり、事例についての投影的解釈であったりと、研究の方向性や目的が限定されている。従って、撮影された写真を通して撮影者の自己に関連する世界を検討する目的で分析がなされている訳ではない。

日本の女子大学生を対象にした研究 (向山, 2010) では、被写体である「人物」「物」「場所」のうち、最も多く選択されるのは「物」であり (米国では人物を被写体とした写真が8割以上)、中でも日用品、音楽、服飾、書籍の撮影枚数が多いこと、ただし自分を表現する上での重要度といった観点を加味すると、重要度の上位は「人物」、特に友人や親 (母親) が多く含まれる等の特徴が報告されている。また、「人物」を被写体とした写真と個人特性との関連については、外向性の高い者は人物写真を多く撮影し、社会的不安の高い者は人物写真の撮影枚数が少ない傾向があった (米国では人物写真の多さは外向性・愛着性と、少なさはシャイネスとの関連が報告されている)。その他、日米の高齢者の自叙写真を比較した研究では、日本の高齢者では庭・住宅・自宅内やその周辺の写真が多く、米国の高齢者では人物写真が多いとの報告 (Okura, Ziller, & Osawa, 1985-1986) や、

日本の高齢期の夫婦のパートナーシップを検討するために、大切なものや日常生活に関する写真を分析した研究がある (植村, 1996)。

自叙写真法には先述したような特徴や利点があり、撮影者の自己に関連した世界を知るための有力な手段となる (e.g. Ziller, 1990; 向山, 2010)。しかしながら、この方法を用いた研究の進展の障壁となっているのが写真という素材の処理の難しさである。撮影者の自己関連世界を把握するためには、幅広い年齢層を対象として、性格等の個人特性データとも対応づけながら、自叙写真を体系的に理解するためのコーディングシステムを構築する必要がある。本研究では、まずは女性の自叙写真を資料として、分析の手段となるコーディングシステムを構築し、併せてデータベースの作成を目指すものである。これらの作業を通じて、自叙写真法という研究法の洗練のみならず、女性の自己概念・自己認知・アイデンティティの研究分野に新たな知見をもたらすものと考えている。

## 2. 研究の目的

(1) 青年期・中年期・高齢期の女性の自叙写真を分類・整理するためのコーディングシステムを構築する。

(2) 自叙写真と個人特性データとの関連を検討するためのツールとして、性格尺度を整備する。

(3) 構築したコーディングシステムを反映させた自叙写真データベースを作成する。

(4) 各年齢層の自叙写真の比較や個人データとの関連から、女性の自己と環境世界との関わり方を考察する。

## 3. 研究の方法

### (1) 青年期から高齢期までの女性の自叙写真を分類・整理するコーディングシステムの構築

① 青年期女性データの発展的検討：女子大学生 133 名を対象とした自叙写真の研究(向山, 2010) で見出された、被写体および表現内容に関する分類カテゴリーをさらに発展させるため、先行研究 (e. g. Clancy & Dollinger, 1993; 安川, 2008) を参考に、「人物」写真について、被写体となった人物間の“関係性”の指標を追加する。具体的には、被写体となった人物の微笑み、被写体間的身体的近接、被写体同士が触れ合っているか(接触)を指標とする。また、これら指標と撮影者の性格との関連について検討する。

② 中年期・高齢期女性データの分析：上記①で述べた青年期女性の自叙写真の分類カテゴリーを用いて、30代から60代の女性の自叙写真の分類・整理を試みる。分析の対象となったのは、30代後半から60代の女性 14 名(全て既婚者、平均年齢 49.3 歳)の自叙写真 168 枚である。うち、30代後半から50代の 11 名(30代: 5 名、40代: 3 名、50代: 3 名)を中年期、60代(3 名)を高齢期とする。作業の過程で新たなカテゴリーが必要となった場合や、既存のカテゴリーの修正が必要となった場合には、逐次、追加や修正を行う。追加や修正を経て作成された分類カテゴリー群を、ここでは試行版コーディングシステムと称する。

### (2) 性格尺度の整備

① 擬態語性格尺度の妥当性の検討：研究参加者の自叙写真の特徴と性格特性との関連を検討するため、尺度として一定の性能を備えた性格尺度の整備を進める。具体的には、小松・酒井・西岡・向山(2012)が作成した 6 下位尺度からなる擬態語性格尺度(60 項目、5 件法)について、尺度の妥当性を検討する。

② 擬態語性格尺度短縮版の公表：擬態語性格尺度の妥当性の検討と並行して、より簡便に

実施できる短縮版についての結果をまとめ、論文として公表する。

### (3) 自叙写真データベースの作成

(1) の②で述べた試行版コーディングカテゴリー(自叙写真の分類カテゴリー群)を「見出し」とし、「見出し」に当てはまる自叙写真を容易に検索・分類できるデータベースを作成する。データベースには、画像と見出しに加えて、研究参加者の個人属性や個人特性データも含めることとする。なお、作成するデータベースには逐次データが追加できるように、また必要に応じて「見出し」を修正・追加対応できるように構築する。

### (4) 女性の自己と環境世界の関わり方の考察

試行版コーディングシステムを用いて分類・整理した、青年期から高齢期の女性の自叙写真について、データベースを活用しながら比較・検討し、各年齢層の自叙写真の特徴を示し、女性の自己認知の変容やアイデンティティの在り方について考察する。

## 4. 研究成果

### (1) 青年期から高齢期までの女性の自叙写真を分類・整理するコーディングシステムの構築

① 青年期女性データの発展的検討：青年期女性が撮影した 530 枚の人物写真のうち、288 枚(54.0%)に微笑みが見られ、130 枚(24.5%)が近接、95 枚(18.0%)が接触に分類された。これらの結果は、日本の男女大学生を対象とした安川(2008)の結果と比較すると、いずれのカテゴリーもより高い比率を示している。Clancy & Dollinger(1993)では、“関係性”の指標として 5 つの分類カテゴリーを採択しているが、これら指標については性差が報告されており、男性よりも女性の方が“関係性”カテゴリーに分類される写真が多かったという。これより、本研究が女性のみを対象としていることが結果に影響した可能性が考えられる。性格との関連については、Dollinger & Clancy(1993)では、外向性や調和性の高さや人物カテゴリーに分類される写真の多寡との関連が示されている。Dollinger らの結果より、“関係性”の指標は撮影者の性格、特に愛着性との関連が仮定されることから、本研究では“関係性”の指標と FFPQ(5 因子性格検査)との関連を検討した。結果、本研究で取り上げた“関係性”の指標と愛着性との間には、有意な関連は見られなかった。

② 中年期・高齢期女性データの分析：中年期と高齢期女性の自叙写真データを分類・整理する過程で、新たな分類カテゴリーが必要となった。まず、「人物」写真については、撮影者と対象者との関係について、向山(2010)による青年期女性での 7 つの分類カテゴリー(友人・恋人・親・きょうだい・祖父母・家族・その他)に加え、新たに“夫”“子ども”

“孫”“同僚”“近隣”を追加した。また①で述べた“関係性”カテゴリについて各年齢層を比較すると、“関連性”カテゴリに分類される写真の比率は、青年期よりも中年期・高齢期で高く、Clancy & Dollinger (1993)の結果を踏襲する結果となった。「物」および「場所」写真については、被写体の意味に関するカテゴリの見直しや追加を行った。うち、「物」写真は中年期から高齢期の全ての年齢層においても、青年期と同様に撮影枚数が最も多かった。「物」によって表現される内容について、先行研究(向山, 2010; 安川, 2008)をもとにカテゴリの見直しを行った。結果、新たにカテゴリを追加する必要性は生じなかったが、青年期では「物」を自身の現在の活動や行為と関連させて意味づける「好み-活動」「好み-対象」等への分類が多く見られるのに対し、中年期や高齢期では、過去から現在に至る連続性や自身の経験の記録として「物」を意味づける「思い出」等に関する回答が多い傾向がみられた。また「場所」については、向山(2010)の6つのカテゴリ(居場所・解放感・好み-対象・繋がり-所属・性格・理想の体現)に加え、新たに“一体感”“平穏”を追加した。これは、中年期や高齢期のデータにおいて、ガーデニングや畑仕事、散歩等の活動を通じて自身が自然の一部であるといった反応や、近隣の愛着ある場所と結びつけて心身の平穏や平和に言及する反応が複数見られたことによる。

## (2) 性格尺度の整備

①擬態語性格尺度の妥当性の検討：臆病さ(おどおど等)・緩やかさ(ほんわか等)・几帳面さ(きちんとする等)・不機嫌さ(いらいら等)・淡泊さ(さっぱり等)・軽薄さ(ちゃらちゃら等)の6下位尺度からなる擬態語性格尺度(小松ら, 2012)は、自己と他者の性格を共通の項目で測定できる。擬態語性格尺度のこの特長を活かし、大学生の同性友人ペアを対象とした調査と面接を実施し、親密な同性友人間における性格の自己評定と他者評定の差異や関連を検討した。性格認知と親密な同性友人間のリーダー/フォロワー関係性についての分析結果から、“友人が自分をリードしている”と認知する者は、友人を「几帳面」「淡泊」に、自分を「緩やか」「臆病」に評定するなどの知見が得られた。性格の認知と友人関係上の役割認知との間に一定の関連が見られたことから、擬態語性格尺度の妥当性を支持する結果と考える。以上の結果をまとめ、論文として公表した(小松・向山・西岡・酒井, 2016)。

②擬態語性格尺度短縮版の公表：30項目からなる擬態語性格尺度の短縮版に関する結果をまとめ、尺度に含まれる項目、尺度の信頼性と妥当性を含めた内容を論文として公表した(酒井・西岡・向山・小松, 2015)。

## (3) 自叙写真データベースの作成

青年期女性の自叙写真 1915 枚(向山, 2010)と、中年期および高齢期女性の自叙写真 168 枚を併せたデータについて、先述の試行版コーディングシステムを反映させたデータベースを構築した。このデータベースには、研究参加者の基本属性(年齢等)、写真集や研究参加に関する質問への回答(感想等)、自叙写真の画像と分類カテゴリ(見出し)、個々の撮影した写真に関する記録(被写体等)、個人特性データ(性格等)を入力されている。なお、現在も入力作業を継続中であるが、入力が完了した部分のデータについては、分析が可能な状態にある。

## (4) 女性の自己と環境世界の関わり方の考察

自叙写真の撮影者と対象者との関係を理解するために、「人物」写真については新たに“子ども”等のカテゴリを追加する必要性が生じた。このことは、青年期と比較して、中年期・高齢期には、自身と関係する人々の幅が地域・年代を超えて広がることを示しており、日常的な経験とも合致する結果と考える。また、新たに“関係性”という分類カテゴリを追加したことにより、女性、特に中年期・高齢期の女性においては、他者との“関係性”を通じて自己認知や自己定義がなされている可能性が示唆された。一方で、“関係性”と FFPQ の愛着性とは関連が見られなかったことから、この結果は個々人の性格特性というよりも、むしろ発達に伴う一般的傾向と考えるのが妥当かもしれない。ただし、性格特性との関連については、相対的に「人物」写真の撮影枚数が少ないことが結果に影響した可能性も考えられる。

撮影枚数の多さから、「物」による自己定義は年齢を問わず、日本の女性の自叙写真の特徴と考えられる。ただし、「物」が表現する内容は年齢層で違いがみられ、青年期よりも中年期・高齢期の女性において、過去から現在に至る時間連続性や経験の記録を示す対象として「物」を意味付けがなされていることが示唆された。また「場所」については、“一体感”“平穏”のカテゴリが追加されたことから、中年期や高齢期は青年期に比べ、素朴な自然観や世界観ともみなすことができるような、より大きな枠組みで自己や環境を捉えている可能性が示された。

## (5) 研究成果のまとめと今後の課題

本研究では、試行版コーディングシステムの作成や活用を通じて、青年期女性と中年期・高齢期女性との自叙写真の被写体や表現内容の違いを見出すことができた。またデータベースの構築により、データの集約と検索や分析作業の効率化を進めることができた。さらに、擬態語性格尺度を整備することによって、性格という面から自叙写真の特徴を検討することも可能になった。現時点では高齢期データは 60 代のみであるが、高齢化や独

身者の増加といった日本の現状を踏まえ、70代以降のデータを収集すること、既婚者のみならず独身者のデータ収集することも視野に入れる必要がある。今後は、データベースへの既存データの入力を継続しつつ、新たなデータを加えることでデータベースの拡充を試み、これと並行して試行版コーディングシステムの見直しも継続していく必要がある。特に、米国では相対的に「物」「場所」の撮影枚数が少ないためか、「物」「場所」を分類するカテゴリーはこれまで僅かしか提案されていない。しかしながら、「人物」に比べて「物」や「場所」、特に「物」は種類が多く、その意味付けも多様である。例えば、安川(2008)は「物」について8つの分類カテゴリーを提案しているが、報告時点では十分な成果が得られなかったと述べている。「物」による自己定義が日本における自叙写真の特徴であるならば、「物」の分類カテゴリーについては今後も検討を続ける必要があるだろう。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2件)

①小松孝至・向山泰代・西岡美和・酒井恵子  
擬態語による性格認知と友人関係における  
リーダー／フォロワー認知 心理学研究  
第 86 巻 589-595 頁 2016 年 (査読有り)  
<http://doi.org/10.4992/jipsy.86.14332>

②酒井恵子・西岡美和・向山泰代・小松孝至  
擬態語性格尺度短縮版の作成 パーソナリ  
ティ研究 第 24 巻 163-166 頁 2015 年 (査  
読有り)  
<http://doi.org/10.2132/personality.24.163>

[学会発表] (計 8件)

① Mukoyama, Y. Characteristics of  
Auto-Photography of Japanese Young  
Women Based on Content Analysis.  
*Presentation at Society for Personality and  
Social Psychology Annual Convention, Self  
& Identity Preconference*, 19th January  
2017, San Antonio, U.S.A.

② Mukoyama, Y., Nishioka, M., Komatsu,  
K., & Sakai, K. *Gitaigo* as a means of  
determining the characteristics of  
Japanese personality cognition.  
*Presentation at 2016 American  
Psychological Association Annual  
Convention*, 5th August 2016 Denver,  
U.S.A.

③ Komatsu, K., Sakai, K., Mukoyama, Y.,  
& Nishioka, M. Japanese way of  
representing mildness of personality:  
Focusing on *Gitaigo*, mimetic words in the  
Japanese language. *Presentation at the*

*31st International Congress of Psychology*,  
27th July 2016, PACIFICO Yokohama,  
Yokohama, Kanagawa, JAPAN

④酒井恵子・向山泰代・西岡美和・小松孝至  
擬態語性格尺度と価値志向性尺度との関連  
日本心理学会第 79 回大会 2015 年 9 月 24  
日 名古屋国際会議場 (愛知県名古屋市)

⑤西岡美和・小松孝至・酒井恵子・向山泰代  
親密な友人関係における性格の認知 (4)  
- 3 種の評定の差からみる友人間の類似性 -  
日本教育心理学会第 56 回総会 2014 年 11  
月 8 日 神戸国際会議場 (兵庫県神戸市)

⑥ 向山泰代・酒井恵子・西岡美和・小松孝至  
親密な友人関係における性格の認知 (3)  
- 擬態語による性格認知と友人関係上のリ  
ーダー／フォロワー認知についての事例的  
検討 - 日本心理学会第 78 回大会 2014 年  
9 月 12 日 同志社大学 (京都府京都市)

⑦小松孝至・向山泰代・西岡美和・酒井恵子  
親密な友人関係における性格の認知 (2)  
- 友人間におけるリーダー・フォロワー認知  
と擬態語性格尺度による自他評定との関係 -  
日本心理学会第 77 回大会 2013 年 9 月  
20 日 札幌コンベンションセンター (北海道  
札幌市)

⑧小松孝至・酒井恵子・向山泰代・西岡美和  
親密な友人関係における性格の認知 (1)  
- 擬態語性格尺度を用いた自己・他者評定の  
平均と相関 - 日本教育心理学会第 55 回総  
会 2013 年 8 月 18 日 法政大学 (東京都千  
代田区)

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

向山 泰代 (MUKOYAMA Yasuyo)

京都ノートルダム女子大学・心理学部・教授

研究者番号：80319475

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：

(4) 研究協力者

( )